

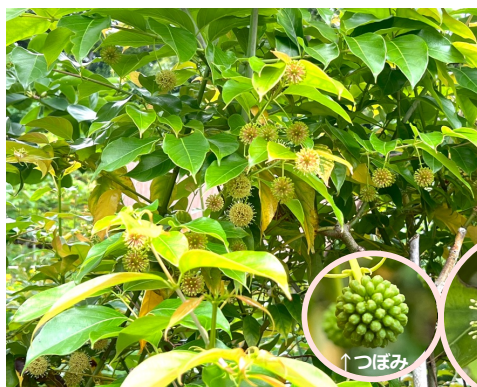
Vol. 53に寄せて

雨の多い梅雨の季節となりました。少し鬱陶しく感じる時もありますが、植物に必要な潤いを与える恵みの雨の時期でもあります。この時期の花といえば、アジサイを思い浮かべますが、ペニバナも見頃を迎えます。ペニバナの花は紅い染料に用いられ有名ですが、生薬としては駆瘀血作用を有し、婦人病に用いられます。ペニバナの花が最盛期を迎えると、植物園では写真(右)のような華やかな風景を見ることができます。 ペニバナは植物園レターVol. 3で詳しく紹介しております。



6月に見頃を迎える植物：カギカズラ（アカネ科）

和名：カギカズラ
学名： *Uncaria rhynchophylla* Miquel
薬用部：トゲ
生薬名：釣藤鉤、釣藤鉤
(チョウトウコウ)
用途：降圧、鎮痙、鎮静
栽培場所：植物園 1 号園北側の斜面
開花時期：6-7月



カギカズラについて

日本の西南部および中国の山地や林内に自生する常緑性の藤本（トウホン：つる性の木本）植物である。葉腋に短枝が変形したかぎ状のトゲが付く。トゲは節ごとに2個と1個が交互につき、他の植物にトゲを絡ませながら伸長し、数十m伸びることがある。葉は対生し、葉身は楕円形、長さ5~13 cm、幅3~7 cm、紙質で両面無毛である。6-7月に、球形で径約2 cmの花序が、長さ2~3 cmの柄の先につく。花冠は白緑色、花柱が外に長く伸びる。花後にできる果実は蒴果で約5 mm、種子は長さ0.5 mmで両端に長い翼がつく。

釣藤鉤について

日本薬局方収載の生薬で、カギカズラ以外に *U. sinensis*, *U. macrophylla* が基原植物とされ、名医別録（神農本草経と同時代の本草書）では下品に収載される。春と秋に、トゲを伴った茎を切り取り、日干しして乾燥させる。湯通しまたは蒸すこともある。インドール系アルカロイドを主要成分として含み、一般漢方294処方中6処方に降圧、鎮痙、鎮静を目的に配合される。釣藤鉤配合の漢方薬は、小児のひきつけ、大人の高血圧などに用いられるほか、認知症の治療にも活用されているものがある（裏面を参照）。



釣藤鉤（チョウトウコウ）

6月に見頃を迎えるその他の植物 <科名はAPG分類体系による>



アジサイ（アジサイ科）
生薬名：紫陽花（シヨウカ）
薬用部：花
効能：解熱など



シチダンカ（アジサイ科）
八重咲で、萼片が剣状に尖って星状に見えるのが特徴で、発見されるまでは、幻のアジサイと呼ばれた。



ナンテン（メギ科）
生薬名：南天実（ナンテンジツ）
薬用部：成熟果実
効能：鎮咳、消炎



ハマボス（サクラソウ科）
海岸の岩上などに生える2年草で、花穂が仏具の仏子（ホッス）に似ているのが名前の由来である。



クララ（マメ科）
生薬名：苦参（クジン）
薬用部：根
効能：苦味健胃、抗炎症



ドクダミ（ドクダミ科）
生薬名：十葉、重葉（ジュウヤク）
薬用部：花期の地上部
効能：利尿、緩下、解毒など



トウキ（セリ科）
生薬名：当帰（トウキ）
薬用部：根
効能：婦人薬



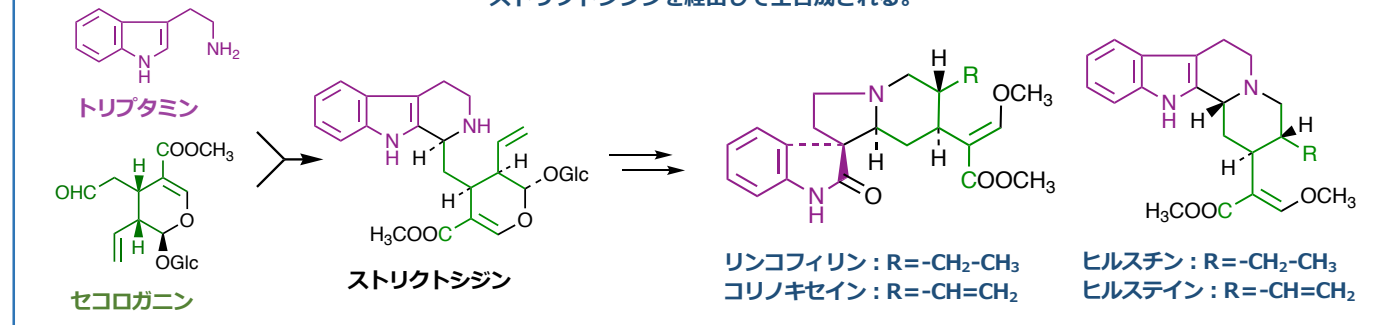
ウツボグサ（シソ科）
生薬名：夏枯草（カゴソウ）
薬用部：花穂
効能：利尿、消炎

釣藤鈎の成分

釣藤鈎には、モノテルペンインドール系アルカロイド類が主要成分として含まれ、オキシインドール型のリンコフィリン、コリノキセイン、インドール型のヒルスチン、ヒルステインなどが報告されている。これらアルカロイドの組成は、植物種、産地によって違いが認められ、カギカズラ (*U. rhynchophylla*)、*U. macrophylla*にはオキシインドール型が、*U. sinensis*にはインドール型が多く含有されるとのことである。基原植物によって組成に違いがあることになるが、日本薬局方の確認試験においては、リンコフィリンまたはヒルスチンの少なくともどちらか一方がTLCで確認されることが規定され、成分含量においては、リンコフィリンおよびヒルスチンの総量が0.03%以上と規定されている。これら組成の違いが薬効にどのように影響を及ぼすのかについては気になるところである。

インドール系アルカロイドとその生成

これらのインドール系アルカロイドは、トリプタミンとセコログニン（モノテルペン）からストリクトジンを經由して生成される。



釣藤鈎配合の漢方薬

釣藤鈎のエキスには、血圧降下作用、血管拡張作用、抗痙攣作用、空間認知障害改善作用などが報告されており、上記のアルカロイド類が主有効成分と考えられている。漢方では、平肝（五臓における肝の機能亢進を抑える作用）、止痙、降圧などを期待し、高血圧の随伴症状や精神的な興奮、不眠などの改善を目的として七物降下湯、抑肝散、釣藤散などに配合される。

七物降下湯：補血剤である四物湯に、釣藤鈎、黄耆、黄柏を加味した処方、脳血管を広げて循環を良くする作用があり、虚弱な人の高血圧に伴う随伴症状（のぼせ、耳鳴りなど）の改善に用いられる。

抑肝散：釣藤鈎と柴胡で肝の気のたかぶりを緩解し、神経の興奮を鎮める。虚弱な体質で、神経がたかぶる人に適応があり、小児の夜泣き、ひきつけ、疳の虫に使われるほか、大人のイライラ、ヒステリーなどにも用いられる。また、認知症による幻覚、妄想、徘徊、暴言などの周辺症状に対して効果が認められ、日常生活動作を低下させることなく改善することから、近年は多く利用されている。

釣藤散：主剤である釣藤鈎が肝の亢進を抑え鎮静、降圧、止痙に働き、また上部の熱を取る石膏なども配合され、慢性的に続く頭痛やめまい、耳鳴り、のぼせなどに適応がある。また、脳血管性認知症に対して、二重盲検法による臨床試験で有効性が示されている。

植物園のアカネ科つる性植物

アカネ科のつる性植物として、現在2号園で支柱を立てて栽培しているヘクソカズラを紹介する。

ヘクソカズラ (*Paederia foetida*) は、日本全国のやぶ、草むらなど日当たりの良い場所で見かけるつる性の多年草である。茎は下から見て左巻きで長く伸び、葉は対生する。8-9月、葉腋から短い花序を出し、外側は白色、内側は紫紅色で、花冠が浅く5裂した筒形の花を多数つける。果実は6 mmの球形で黄褐色に熟する。葉や茎（果実も）を傷つけると悪臭を放つことがありヘクソカズラ（屁糞葛）と呼ばれる。この悪臭は、植物に含まれるイリドイド配糖体のペデロシドが酵素によって分解され生成したメタンチオール (CH₃-SH) であり、食害を与えてくる虫などから身を守るために、植物が生成していると考えられている。一方、臭い植物として知られるが、ヘクソカズラは薬用としても用いられ、すりつぶした果実は、ひび、しもやけ、あかぎれなどに外用、あるいは腎臓病などに内服する民間療法がある。また、根や茎葉を乾燥させたものは鶏屎尿（ケイシトウ）と呼ばれ下痢、黄疸に効果があるとされる。

MEMO：名前の由来

カギカズラの属名 *Uncaria* は、ラテン語でかぎ (uncus) を表している。和名もそれにちなんでおり、カズラはつる性の植物の総称として用いられている。生薬名の釣藤鈎は、釣り針のようなかぎ型のトゲのある藤（つる性の木本）を意味している。「かぎ」は漢字で鈎と書き、鈎は鈎の略字であることから、両方が用いられている。



ヘクソカズラ

ユニークな薬用部

今回は、カギカズラのように、変わった部位を使う生薬を紹介します。

柿蒂（シテイ）：カキノキの成熟した果実のへた（ガクや果柄などにあたります）。しゃっくりを止める効果があり、漢方薬（柿蒂湯）にも配合されます。



柿蒂

サフラン：アヤメ科サフランの柱頭。鎮静、鎮痙、通経の作用があり、主に婦人薬などに配合されます。

サフラン

五倍子（ゴバイシ）：ウルシ科ヌルデの葉などにできた虫こぶ。虫こぶは植物に虫が寄生し、植物の組織が異常増殖してできたこぶ状のもの。タンニンを多く含み、収斂、止瀉などの薬用以外に、染料としても用いられます。



五倍子

編集後記

今回のテーマ植物「カギカズラ」は、植物園で長く栽培していたものの、長い間、花をつけることがありませんでした。しかし、栽培方法などを工夫することで、昨年から花をつけるようになりました。鞠玉（まりだま）のようなかわいい花が今年も咲いていますので、ぜひ、見に来てください。

神戸薬科大学 薬用植物園

園長 土反伸和（医薬細胞生物学研究室 教授）

西山由美（文責）、平野亜津沙、大井隆博

E-mail : nisiyama@kobepharm-u.ac.jp

総合教育研究センター支援部門 竹仲由希子

